

大體七百五十萬圓見當の年營業收入があるが、その五分の四は貨物輸送の收入で、その輸送噸數は鐵陸品（大同の石炭、龍烟の鐵礦など）が最も多く、農・林・獸の順になつてゐる。

蒙疆政權の成立と共に、鐵道の性質が一變したことは勿論で、今後は蒙疆地區唯一の開發線として、また赤色勢力防禦線として重要な役割を果す



### 京綏鐵路沿線の戰闘

#### 【京綏線の戰略大觀】

車變當初の北支戰線を、北京天津を中心とした鐵道によつて分類すれば、京漢、津浦、京綏の三線に大別されよう、今假りに京漢戰線を平野の戰闘とすれば、津浦戰線は河の戰闘であり、京綏戰線は山嶺の戰闘といふ事が出来る。吾々は今、今次車變にお

に到るであらう。

さてこゝで、我が軍がこの京綏線を中心として、山岳に平地に、その苦戰の蹟をたどることは、一層同線の重要性と、今車變に於て山岳地帯の戰闘がいかに困難であつたかを知るによく、しかもこの困難に勇奮した皇軍將兵の勞苦を偲びつゝ、蒙疆地區へど入つて行くこととしよう。

0834

ける北支の戰闘を回想するに當つて以上の如き戰闘の特色を先づ考慮に入れて、これを大觀するの

も決して無意義でないと思ふ。  
若澤橋事件を契機とする北支の風雲は帝國の現地解決、不擴大方針を蹂躪する總兵不信の廿九軍が郎坊（北寧線天津―北京の中間）に、或は北京

廣安門に、或は通州にと暴舉的挑戦行爲を續發し七月末日には最早や如何ともし難く日支の全面的衝突は絶對不可避の狀態に到達したのだつた。

廿九軍、並に國民政府は、京津地方の我が兵力の寡少弱勢に乗じて一環に激戦、緒戦に大勝を博さんとしたのである。

それかあらぬか、早くも八月一日には、山東省主席韓復榘は蔣介石の招徠に接し、濟南から南京に到着、蔣介石、湖五祥と會見し、中央軍の山東進出による韓復榘麾下との共同作戰の瞭解を遂げ、中央軍は敵々山東、山西、綏遠の三方面より、京津地方を包圍せんとする企圖が暴露された。吾輩なる企圖のみか、この時既に中央軍の北上は開始されてゐたのであつた。殊に重鎮たる山嶽と、萬里長城を天與の防壁としたわ京綏線方面から東漸南下して一擧に冀兵日本軍の側背を衝き、北京を手に入れ、更に進んで天津をも包まんとするの

態勢は、戰略的に云つて、當然の事とは云へ、我に取つては容易ならぬ重大事であつた。

京綏線ハ魯哈爾、綏遠地方が、滿洲國に接し、また一方ソウイエートの完全勢力下にある外蒙古と接する點だけからみても、この方面の軍事的重要性は一見して明瞭であらう、この地方に於いて敵が優位の地歩を占むるか、味方が優位の地歩を占むるか、その軍事上政治上の絶大なる重要性に至つては北支に於ては勿論のこと、滿洲國としても、絶對に棄て置けぬ重大事といふよりも、或は勝敗を決する岐路ともいふべきであらう。

されば、京綏線に繰り出された精銳無比の關東軍が疾風迅雷の神速、勇戦を以つて、また内地より派兵された我が軍の精銳が北支到着と共に、開戦を容れず進撃を開始したのは容易になつて居るところであらう。

八月三日午前七時某地飛行根據地であつた我が

中富部隊は京綏線第一回の爆撃を敢行した、場所は張家口より北京寄り、宣化の東南方京綏線上下花園附近、張家口方面にあつた團錫山崖下の高料地の第八十四師と後続二ヶ師の大部隊が多数の軍用列車を運んで、北京方面へ向つて進撃しつゝ、ある山岳を叩いたわけだつた。多数軍用列車の顛覆、生れて初めて機上よりの爆撃を喰つた敵の狼狽振りはいさゝし千載一遇だつた。

これ迄も、廊坊、通州、天津その他隨所に我が空軍の猛烈且つ正確な爆撃に散々悩まされた支那軍は、最近洛陽飛行場(隴海線上海南省)に各種飛行機二百餘機を集積すると共に更に共産軍と安協して軍費五百萬元を支給し國境を越えて、滿洲國熱河方面に進出せしめ滿洲國境方面の探偵戦術に出でんとするとの情報がいさゝしに傳へられたのである。

八月四日某地飛行根據地を勇躍出發した陸の荒

驚中富部隊は前日に引き続き京綏線下市の敵八十四師に對し、懷來、下花園附近で爆撃を敢行し、敵の装甲列車を木ッ葉未塵に打ち砕き、そのため敵は一時その南下を中止するの止むなきに至る程の打撃を蒙つた。然しそれは文字通り一時的であつた。

かくして五日、六日、七日と彼我地上部隊の京綏線上の衝突の危機は愈々切迫の度を加へ來つたが、八日に至り綏遠省主席傅作義が京綏線方面の支那軍前衛司令官に任命せられた。

一日置いて十日には續々とその勢力を増加しつつある支那軍は遂に、日支双方の協定により支那軍の侵入出來ぬ地帯(海津、可爾欽協定に基く)即ち河北省境附近へ向けて不法進撃し、察哈爾省東南部の延慶(京綏線河北、察哈爾省境北方長城線に沿う西北方内線)から永寧附近まで進出するに至つた。

0836

かへ、加へて陝西北部にゐる共産軍が山西を経て東北方へ進撃中の情報もあり、今や此處に至つて京綏線は戦機全く熟してまさに山雨至らんとする状態となつたのである。

(時既に敵は南口一帯に至る京綏線上に約六ヶ師以上の兵力を集積してゐた。即ち中央軍第十三



### 南口附近の激戦

八月十一日、京綏線上、日支兩軍最初の火蓋は切られた。北京より離ること僅かに十四五里、南口一帯、長城線の要塞を背景として、中央軍第十三軍湯恩伯麾下の第八十九師(師長玉仲廉)の挑戦的氣勢に、最初の鏖戦を下すべく我が山田、長野、栗飯原、大場、坂田各部隊は十一日午後二時半ごろから猛烈な砲撃を開始した。事變勃發以來、最初の支那中央軍との交戦である。

一四八  
軍八十九師―南口、永寧、延慶、懷來一帯地區、同じく第十三軍第四師は下花園、河城一帯地區、第八十四師は赤城、龍關一帯地區、第四百四十三師は張家口、宣化間一帯地區、第八十六師、廿一師は大同附近に配置されたものゝ如し)

雨を知らぬ北支の眞夏、百度を越える灼熱の中の戦ひである。これより先、我が第一線部隊は同日午前八時ごろ南口南方龍虎峯を占據し、地勢不利乍ら寡兵而も敵を呑んでの攻撃開始だつた。南口は察哈爾山岳地帯の突端、河北平原が北へ伸びんとして疊々たる山地に阻まれ、天然の城壁をなせる高地、且つて奉直戰當時、張作霖軍約廿萬が南口攻撃を敢行したが、僅か二千の直隸軍のため反撃

0837